アーチルニュース　ちぇなっぷ

発行元：仙台市発達相談支援センター　〒981-3133 住所 仙台市泉区泉中央２丁目 24－1
TEL：022-375-0110 Fax:022-375-0142　e-mail:fuk005410@city.sendai.jp
http://www.city.sendai.jp/kenkou/hattatsu/gaiyou

日々の体験で培った力を発揮するということ

「人は誰かから守られながらも誰かを守らなければならない立場で生きている。発達は重要である。しかし、発達して新たな力を身につけることそれ自体が重要なのではない。身につけた力はそのとき生活の中で使い、生かすことではじめて意味をなす。」・・

浜田寿美男先生（奈良女子大学教授）の講演を伺いながら、障害児のお母さんたちによる「まろん」の活動を考えていました。

ちぇなっぷ９号（2005.11）で紹介した「保護者による新たなつながり“まろん”。～かつては、子供と一緒に死んでしまうのではないかと夫から心配されたこともあると言うお母さんは、今「まろん」のスタッフとして、障害児を育てることになった後輩お母さんの不安や悩みを聴いています。障害児を育てながら様々な体験があるからこそ共感を持って後輩お母さんの話を聴くことができると言う母たち。自分の後から子育てを始める母たちの悩みを聴き、あのとき会いたかった自分になればいいのだと変化し、自らを開き合い、自身も救われるという。「まろん」に来ることができない遠方のお母さんたちにも心を寄せて、出張まろんとして地域に出向く母たち。大上段に構えることはないけれど、等身大の活動が大きくなっていく「まろん」～

本来持っている力が生活（体験）するなかで育ち、そこで得た力を他者に活かすことで元気になっていく。お母さんたちが作成した「まろん」本には、“当事者（保護者）活動”と一言でまとめてはもったいないくらいたくさんの宝が含まれています。

過日行われた厚生労働省「発達障害者施策検討会」では“支援を受ける側の力”に言及していました。“これまでは直接処遇職員（保育所・幼稚園・学校など）や専門的な支援を行う者がいかに支援を行うかといった視点による支援手法の研究や普及が主であったが、今後は当事者や家族自身がいかに問題解決を図るための方法を身につけるかという視点による研究や普及も必要である”と。

「まろん」が後輩に、そして地域につながることで生まれる新たな気付きや元気を目の当たりにし、“本人・家族を中心に据える”という支援の基本姿勢とその意味の重要性を改めて認識しています。

所　長　今田　愛子

※ちぇなっぷは「CHIN UP・前を向いて」の意味です。

まろんのあゆみ

～お母さんの部屋からのメッセージ～

平成 17 年 10 月からスタートしたお母さんたちの部屋「まろん」。
アーチルの初期療育グループで先輩お母さんとして活動してきたお母さんたちの「役に立ちたい」「できることをしたい」という思いが重なったことから始まった活動です。
「まろん」ができてから約３年になろうとしています。「まろん」の部屋でたくさんのお母さんたちとの出会いがありました。お母さんたちの「私たちにできることはなんだろう？」の気持ちから、「地域」に出かけての活動に発展し、まろんの「本」が完成したりと、「まろん」はどんどんと実を結んできています。
今回は、「まろん」のあゆみについて、お母さんたちのメッセージを通してお届けします。まろんのお母さんたちが「つながる」ことで何が変わってきたのか考えてみたいと思います。

地域での子育て支援

平成 18 年 5 月の第二回ネットワーク会議のなかで，「『まろん』に来たくても来れない人のニーズに応えよう，一緒に活動したい人の『つながり』をひろげよう」と話し合い，平成 19 年 6 月には太白へ，9 月には若林へ，11 月には袋原へ出かけました。

思いの丈を話せてちょっとホッとし，ついでに笑って帰れる場所が近くにあったらやっぱりいいのかも…。出会いとおしゃべりがいろんなきっかけになれたらと願いながら，私も自分を振り返り，気付き，そして元気をいただきに「まろんｉｎ○○」へ出かけています。
（三浦　久美子さん）

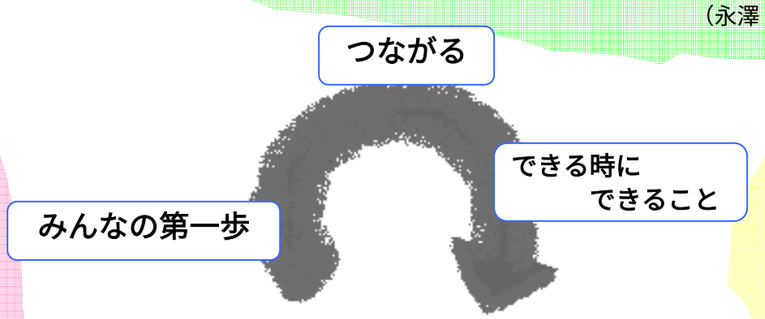
昨年，まろんｉｎ太白，まろんｉｎ若林に参加しました。当日は，参加してくれた方々の子育てに寄せる思いに共感！短い時間で，話は尽きないといった感じでしたが，その後地域でグループができて，新しい活動につながったという事が嬉しいです。出会いに感謝です。
（永澤　直子さん）

普段のまろんよりも強く“話したかった”“聞きたかった”というお母さん方の印象をうけました。遠方までは行けない，気軽に話せる機会がない方が，機会を得て胸に抱え込んだものを吐き出す…そんな姿を見ていると出張まろんの大切さも“話す”ということの大切さも強く感じています。
（内山　春美さん）

悩みながらも必死に頑張る沢山の母達。各家庭への情報伝達の格差や，地域の方々や学校と仲良くやっていくための大変さを痛感。でも相手に思いが伝われば力強い味方。母達の思いこそがネットワークを生んでいく源。梅原さん，出番です！
（菅野　婦美子さん）

たくさんの母たちと出会って

平成 17 年 5 月の第一回ネットワーク会議を皮切りに，お母さんたちが「自分達の体験や思いを今，悩むお母さん方に伝えたい」「私たちの『思い』だけではなく，お母さんたちが安心して話せるように，自分たちも無理なく続けられるようにしていこう」と話し合い準備を重ねて，同年 10 月に，まろんは第一歩を踏み出しています。まろんを訪れた方は平成 20 年 7 月までに延べ 237 人になっています。



障がいのある子と一緒に歩んで来たことが「まろん」で若いママ達へのヒントになったりパワーになってくれるのが嬉しい。そしておしゃべりする中で私達も初心にかえったり，ママ達からも元気をもらってお互いに支え合えているのかな！
（宝　順子さん）

「話を聞いて欲しい」「何とかしなくては」とまろんを訪ねて来て下さるお母さん方。話を終えて帰られる時に，何か得られるものがあったかなぁと毎回自分自身で反省しながら，その方の後ろ姿を見送っています。
（宮川　亜津子さん）

相手の話をききながら，自分の子どもと過ごしてきた日々を振り返ったり，その時の自分の気持ちを思い出したりして，気負わず活動しています。だから続いてこられたのかなぁ…というのが，今の正直な気持ちです。
（柴田　和子さん）

お母さん達との出会いの中で，それぞれの悩みや思いがありますが，子供を愛する親の気持ちを毎回感じることができます。言葉にだしたら泣いてしまいそうなお母さんも，帰りに見せる笑顔が素敵で私も元気をもらっています。
（中村　あゆみさん）

こんな話の聞き方で良かったかな～等，活動の後はいつも反省…ですが，帰り際に「楽しかったです」と笑顔で帰られる姿に出会えると，少しは役にたてたかな，と嬉しくなります。たくさん話して，たくさん笑って，元気に前に進めたらいいですよね。
（五十嵐　祐子さん）

「まろん」の活動を通して感じることは，ママ達はみんな子育てに一生懸命だということ。だからこそ「どうして？…」と悩み，誰かと話したい，思いを聞いてもらいたいと「まろん」に来るのではないでしょうか。私達はその思いを聞いて「大丈夫！一緒に元気になろうね」と寄り添い，同じ目線でお話ができればいいなと思っています。
（山崎　智子さん）

子どもの障がいをうけとめきれていない頃，先輩ママから言われた「大丈夫よ」という言葉が私の中でずっと支えでした。まろんに来てくれる不安な気持ちのママは，あの頃の自分と同じ。あの頃の自分が聞きたかったかもしれないこと，いろんなお話をしたり，きいたり…。私も誰かの役に立ちたい。立てるのか？と思い参加し始めました。皆さんにお会いすることによって，自分が元気をもらっています，何度も何度も来て下さるママもいれば，せっかく「まろん」を知ったのに，仙台を離れていくママもいたり。初めていらしたママさんが帰る頃には笑顔になっていく場に参加できることは，すばらしいな，嬉しいなと思いながら，あっ！自分もガンバロー！と思うのです。
（田中　由香さん）

想いを形に

「まろん」で大切にしてきたこと，お母さんたちに伝えたいことを，「もっと伝えたい」思いから，「本を作ろう」というアイディアが生まれました。平成 20 年 3 月に完成しています。

座談会だけでも５時間以上，文字にして８万２千字の話し合いを，縮めて縮めて濃厚にスタッフの想いがつまったまろん本，手にとって下さった方に「何か」が残る本になれたらいいなと思っています。
（小川　麻子さん）

「私でも何かできるかな～」と軽い気持ちで始めた活動。そのまろんが冊子になると聞いた時は，正直びっくり。私たちの想いや考え等びっちり詰まっています。が，もう少し知りたいなと思ったら是非まろんをのぞいてね。
（佐藤　由美子さん）

『まろん』の本は，各区保健福祉センター，児童館，保育園（所），幼稚園等でご覧になれます。

「まろん」は先輩お母さんと後輩お母さんとの出会いの場。
「まろん」の部屋には，
いつも「あの時の私」と「今の私」がいる。
お互いのつながりが　できればいいのだ。
会いたかった人に　自分がなればいいのだ。
それができれば　あの時の自分が救われる。

かけはし

「アーチル」とは「アーチ（arch：橋）」と「パル（pal：仲間）」とをかけたもので，センターが障害者と市民の「架け橋」になるようにとの願いを込め，市民公募によってつけていただいた愛称です。このコーナー「かけはし」は，読者の皆さんとアーチルが双方向で情報交換できるよう，皆さんや職員からのメッセージなどを掲載していきたいと思います。

安心した地域づくりのネットワークに向けて

発達障害者が地域で安心した生活を送っていくためには，地域で関わる様々な人々の理解や見守りが欠かせません。とりわけ，犯罪やトラブルに巻き込まれやすく，社会的ではない行動をとってしまう発達障害者に対してどのような関わりや支援のネットワークが必要なのかについて，関係機関と協働で検討する機会を設けました。

６月 23 日から４日間にわたり，勾当台公園駅内研修室にて交通局地下鉄駅務員向け研修会を行いました。日常的に障害のある方に接している参加者（延べ 200 人）からは，よりよいサービスのため発達障害のある方の対応のしかたについて多くの具体事例が出され，実演を交えながらの研修となりました。

７月 17 日に仙台弁護士会との間で発達障害に関する学習会をもちました（参加者 25 人）。事例検討を通じて発達障害者に対しての支援のあり方について，弁護士会とアーチルがお互いにできることは何か？連携していくためにはどのような仕組みが必要なのか？などについて意見交換を行いました。

このような取組みを通じて，日常生活のいろいろな場面で理解しようと関わってくれる人たちが徐々に増えていき，発達障害のある方やその家族が安心できる地域づくりへとつながるよう，これからも活動を続けていく予定です。

平成 20 年度　第一回療育セミナーを開催しました！

７月 13 日に市役所８階ホールにて，第一回療育セミナー「発達障害児者への一貫した支援を考える療育･特別支援教育を改めて問う～何を育てるのか，何が育つのか～」を開催し，奈良女子大学教授 浜田 寿美男（はまだ すみお）氏の講演を行いました。

浜田先生からは子供の「育ち」をどう考えるのか，具体的なエピソードを交えながらお話いただき，とかく大人が持ちがちな「力を伸ばす」視点から，「自分が今持っている力を使って生きる」視点へと転換していくことが大切であるということを学びました。

参加者からは「手持ちの力を使って誰かが喜んでくれる体験を積むことが大切であるとの話しは印象に残った。」「自分が子供たちに形式的な学びを強いていないか改めて考える契機とすることができた。」「形あるものがあれば安心しがちな保護者や療育者が多くなっている印象がある中，大切にしなければならないことを再認識できた。」などの意見を多数いただきました。

第二回 療育セミナーを開催します

来る１１月２２日（土）１３：３０から市役所８階ホールにて，第二回療育セミナー「発達障害児者への一貫した支援を考える願いをつなぐ支援のしくみとは～教育と保健福祉の協働した支援体制づくり～」を開催します。講師として東京学芸大学准教授の加瀬 進（かせ すすむ）氏，長野県北信圏域障害者総合支援センター所長 福岡 寿（ふくおか ひさし）氏をお招きします。申込みはメール（fuk005410@city.sendai.jp）又は FAX（375-0142）にてアーチルまで。

編集後記：今回は，第９号で紹介した「まろん」のその後について特集しました。お母さんたちの言葉から，つながりが生む力の素晴らしさやお互いに支え合うことで前に進む力を感じ，編集担当者も励まされました。（佐藤・小野寺（友））